

勝林寺々報

報恩講のこと

一年一度の「報恩講」。
 ご本山でもその末寺でも、そしてご門徒どの家でも、大切に必ずおつとめしてきたこの行事は、いわばご開山親鸞聖人さまのご命日のご法事です。

ご開山親鸞さまは、今からざつと七百二十年前の弘長二年（一一六二）という年の十一月二十八日に、約二十人ばかりの親族・法友にみとられながら、お念仏のなかで静かに九十歳のご生涯を閉じてお浄土へおかえりになりました。

その祥月命日が「報恩講」です。

「報恩講」のはじまりは、親鸞さまの曾孫（ひまご）にあたる本願寺第三代のご門主覚如上人（カクニヨシヨウニン）が、当時の大谷本願寺において、親鸞聖人の三十三回忌の法事を、「報恩講」と称しておつとめになった時にはじまります。

それ以来ご本山では、（本願寺派では新暦によつて一月十六日、大谷派では旧暦のまゝ十一月二十八日）ご正忌（ゴシヨウキ）報恩講として、数ある年中行事のうちでも最も丁重盛大にまつとめられて参りました。

末寺やご門徒でも、ご本山のご正忌に先だつて「お取り越し」と称して毎年欠かさずおつとめしているのです。

「報恩講」はこのように親鸞聖人の祥月命日として、聖人の御遺徳を仰ぐいとなみですが、しかし間違つてならないことは、親鸞さまのためにつとめてあげる鎮魂や供養のための法要ではありません。

このことを、蓮如（レンニヨ）上人は「ご文章」といわれているお手紙の中で次のようにいまし

められております。

「一体、このご正忌報恩講のご法座のなかにお参り下さつて、なんでもかでもご恩にお報いしよう」と、親鸞聖人のご影像の前にぬかづく人のうち、あるいはみずから信心をえていらつしやる人もありましようが、時には自分の信心そつちのけという人もないではありません。

実はこのことこそ、とり落してはならない一大事なのです。

報恩の「報」という字はムクイルと読みます。「向く」「向きなせる」「向きをかえる」などの意味を含んだ字です。

また、「恩」という字は、私の心やいのちのモトという意味にとれます。また恩にあたる仏教のことばはカタンニユウといつて「私のためになされたことを知る」という意味です。

要するに「報恩」ということは、いまこのように生きていく私のために、なされてきた数多くのほからいの方に、向きかえらしてもらうことです。

私一人のために、久遠のいにしえから、はからわれてきたいろいろの「おてまわし」にあらためて出会わしてもらふことが、それが「報恩」ということです。

ですから覚如上人は、最初「報恩講」をつとめるに当つて、みずから三つのねらいを挙げられました。

私が報恩講をおつとめするのは次の三つのこととを思わしていただくためです。

- 一、真宗興行ノ徳ヲ嘆ズ
 八万四千もあるといわれる仏への道のなかから、この私のために設けられてあつた、たつた一つの真実の道を、おえらび下さつた親鸞さまのおはからいを知らしてもらう本願相応ノ徳ヲ嘆ズ
- 二、私のための道は、しかし親鸞さまだけのお指図ではない。それはもともと、大悲の如来さまが、私のためにかけられた願いであつたということを知らしていただく。
- 三、縁後利益ノ徳ヲ嘆ズ
 如来さまが私のいのちにかけられたその願いは、親鸞さまのお徳を通して、おこな

りになつた今も、お念仏となつて私のくらしのなかに舞ひ下さつておられる。その如来のおよび声を聞かしていただく。

そのために報恩講をおつとめするのですと、覚如上人は「報恩講式」という文章に書いておられます。



祭壇

葬儀のこと

遺休を棺に納めたら、多くの場合「祭壇」をしつらえるのが普通です。

「壇」をしつらえる場合は、できれば仏壇の正面はさけてしつらえるのが本来のあり方です。（それは、出棺勤行「ウチドムライ」は仏壇の前でつとめるのが原則であるからです）

しかし、式場や会葬者の都合・家の構造の都合上、仏壇を開くことが出来ない場合もあります。

それはやむをえないとしても、その場合は、必ず祭壇の最上部正面に「おかけじ」（絵像でもお名号でもよろしい。）をおかけすることを忘れてはなりません。若し適当なおかけじがなければ、お寺からお迎えします。

このことは大切なことで、真宗のお葬式では忘れてはならないことです。

なぜかという点、真宗では、死んだ人のなきがらや靈魂を慰めたり供養するための葬儀ではないからで、亡き人と共に如来さまを仰がしうかべながら、如来さまのお慈悲のなかで新たな出会いをもたしてもらふ儀式だからです。

な出会いをもたしてもらふ儀式だからです。

「壇」およびお葬儀はなるべく華美をさけます。すべて白か銀で統一し、前卓は三具足（ローソクは白。花はシキミ）供物も赤色のものをさけて三対以内にとどめます。

最近、葬具店などの商業主義から、不必要なものを持ち込まれたり、あるいは名譽誇示の気持ちは非儀をいつそう華美豪華なものにする願つた傾向が目立ちますが、自戒せねばなりません。

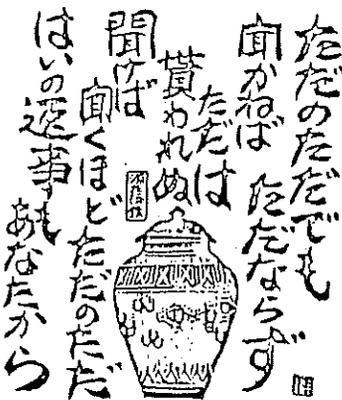
「盛り飯」「一本ばし」「お茶」などは真宗では供えません。ましていわんや出棺のとき茶碗をわつたり火をたいたり壇をまいたりするなどは以ての外です。どんなに親しい人でも死んだ者はケガレだ、一刻も早く追い出し再び帰つて来ないケガレだ、早く私たちの葬儀からとりぞかなければなりません。

棺の上には金らんの棺かけをかけます。これは僧侶の着る七条ゲサであつて、亡くなつた人もすでに僧侶と同じ如来さまのお弟子だといふことです。もしそれにフサがあれば正面手前垂らします。七条ゲサをつけた亡き人は背中フサをかけた。私たちの先達として如来さまを拜していただく姿をそのように示すのです。

亡くなつた方はケガレでも魔物でもありませんから、出て来ないおまじないに棺の上に小刀を置くなどということは、亡き人への冒とくでもあり決してすべきではありません。

友引の日の葬儀の棺の中に、友をさそいには来ないようにとりかたで人形を入れたりしますが、日の吉凶などあるはずもないし、第一残つたものの勝手なエゴをする葬式など、悲しいではありません。

祭壇には「法名」をかかげますが、このことは次号で考えましょう。



ありがとう

若嫁がやつと帰つてきてくれました。今までずっと夫婦二人だけの暮らしでしたからいつべんに家の中が華やいだように思えて、うきうきした毎日です。食事などについてもいかにさきわやかな心づかいをしてくれます。そのたびに私は「ありがとう」を連発して、あとからちよつとてれくさいような気持ちになつてゐるのです。

てれくさいような気持ちのなかで、ふと考えるのです。嫁のしてくるくると、考えてみれば同じことを、しかも長年やつていてくれる古女房に、私は「ありがとう」なんて言つたことがあるのか。と、「ありがとう」のは、ほんとはこの古女房とのあいだがらではなかつたのか。

「ありがとう」ということば。有るはずもないこと。どう考えてみてもあるはずもない不思議なできごと。それが「ありがとう」。

この女房と、こうして夫婦となつたことも思つてみれば不思議です。あれから何十年、実にいろいろなことがあつたのに今もこうしてなんとなく夫婦でいることも、なお不思議です。あるはずもないのにこうして夫婦でくらしつゝあるその不思議さに、「ありがとう」と当然言わねばならぬのに、と思ひました。

考へてみるといまこうして生きてゐることだつて、ほんとは「ありがとう」ことです。戦争の時のことを思ひ出してみます。あいつも死に、あいつも行方不明になりました。私だけが不思議に生きてきました。近ごろでは、同じ年輩の人も若い人も死にます。そのなかで、けがもせず、病もせず、死にもしないでこうしてくらしつゝいること自体、「有り難い」希有なことだつて、いのちの、不思議な尊さに對して、あらためて「有難い」と思はずにはおられませんか。

南無阿彌陀仏のみおしえはおごり・たかぶり・よこしまの難きなかにもなお難し

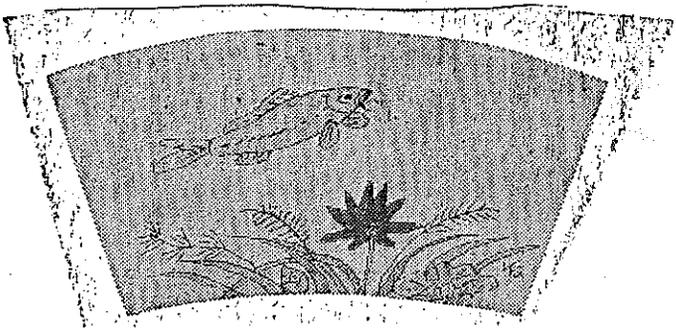
こんな邪見の私に、南無阿彌陀仏のお呼び声が聞こえてくるはずはありません。すなおさまというものの一かけもない高慢な私に、如來さまの親心が、わかるはずはありません。

あるはずもないそれなのに、今こうして私のくらしの中に南無阿彌陀仏が出て来てくださる。あるはずもないのに、有るはずはないのにと、その不思議さのなかで親鸞さまは如來とお出会いになつたのでした。あるはずもない不思議な出会いのよろこびをうたわれたのが「正信偈」という讃歌なのです。

「有難う」ということばは、本来仏教の思想のなから言ひ出されたことばです。ことばだけであつてもよろしい。人と人との間に「ありがとう」ということばが交わされるように。ものを見る目に、「有難い」という思いがこめられるようにしたいものです。

おどろかす
かいこそなけれむらす
すめ
耳なれぬれば
なるこにぞのる

謹啓 住持前住職 真徳院釋尊法師 住生に際しましては御恩萬々御平慰を奉りし、且つ過分の御香資御供物を賜り、御厚情のほど甚に有難く思ふ御礼申し上げます。
お除障にて十一月二十二日 七七日忌明法要も滞りなく相勤めしました。就きましては拝越の上一々御礼申し上げますが、勝手なほど御寛恕願ひ書中をもって御挨拶申し上げます。
尚、御芳情の御礼に代へて本願寺派教学助成財団並びに、出石町社会福祉協議会に一封を寄附させていただきましたので、何卒ご挨拶のほど御願ひ申し上げます。
昭和五十六年十一月二十二日
兵庫県出石郡出石町内町五九
勝林寺 住職 西池哲俊



- 十一月
- 一日(日) 本堂屋根調査委員会・総代会
 - 二日(水) 久美辰四郎寺報恩講説教(住)
 - 四日(水) 前任職三井
 - 六・七日 島根瑞泉寺若院結婚式
 - 八日(日) 前任職月忌
 - 十一日(水) 前任職五七日
 - 十二日(木) 「同朋読本」編集委員会(神戸)報恩講
 - 十四・五日 今年もまた青壮年会のバス送迎あつて、ことにお年寄りが多数ご参詣下さいました。お説教は榎本先生。
 - 十五日(水) 福成寺報恩講
 - 十八日(水) 前任職六七日
 - 十九日(木) 中郷善教寺報恩講説教(住)
 - 二十日(金) 高福寺報恩講
 - 二十一日(土) 前任職忌明法要
 - 二十二・三日 正福寺報恩講
 - 二十四日(火) 「同朋読本」編集委員会(神戸)
 - 二十七日(金) 「みのりを聞く会」
 - 二十八日(土) 寺坂山田益美氏葬儀
 - 二十九・三十日 正法寺報恩講
 - 三十日(月) 出石組組長・教区会議員選挙

- 十二月
- 一日(火) 平田専福寺報恩講説教(住)
 - 二日(水) 佐田報恩講
 - 三日(木) 栗尾報恩講
 - 四日(金) 片岡南繁蔵氏葬儀
 - 五日(土) 森坂報恩講
 - 六日(日) 西宗寺仏蘭創立記念説教(住)
 - 六日(日) 唐川報恩講
 - 七日(月) 保谷・日殿報恩講
 - 八日(火) 奥少谷報恩講
 - 九日(水) 東里報恩講
 - 十日(木) 出合・十六夜会報恩講
 - 十一日(金) 矢根報恩講
 - 十三日(日) 口小谷報恩講
 - 十五日(水) 小田報恩講
 - 十五日(木) 市場報恩講
 - 十七日(土) 和屋報恩講
 - 十八日(日) 百合・寺坂・日野辺報恩講
 - 十九日(月) 「みのりを聞く会」
 - 二十五日(金)

臨時代議員会

懸案の本堂大屋根ふきかえ工事のことにつき、下記により代議員会を開催します。何卒ご出席ご協議下さい。

記
日時 昭和五十七年一月四日午後一時
会場 勝林寺

代議員各位

勝林寺住職